

2022年度

近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会

2022年12月25日・26日

近畿ESDコンソーシアム・奈良教育大学

ごあいさつ



今年もまた、「近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会」を開催できますこと、心より嬉しく思います。ここに集う児童・生徒の皆さん、保護者の方々、先生方、そして会を支えてくださる方々、すべての皆様のご尽力に対し、主催者を代表して厚く御礼申し上げます。

さて、私ども奈良教育大学にとって、2022 年は ESD の推進をさらに加速すべく新たな年となりました。それは「ESD・SDGs センター」を新設したことです。設立を記念して多くのイベントも開催しました。そのキックオフイベントとして行われた、国連事務総長特別顧問の高須幸雄先生によるご講演「SDGs がめざす世界 ―持続可能な社会と人間の安全保障―」では、SDGs の正確な意義や、「積極的平和は、すべて人間の安全、安心、尊厳が実現して初めて達成される」こと等、私たちが時に見失いがちになる最も本質的な重要事項について再認識することができました（ご講演の映像は、本学 HP の ESD・SDGs センターのサイトでご覧いただけます）。

世界にとって永遠に続いてほしいことの究極は「平和」だと思います。しかし、高須先生も SDGs の本質と関わらせて述べておられました。平和とは、単に「戦争がないこと」だけを言うのではなく、「人間の尊厳、安全保障が実現されていること」です。この 2 日間で報告される ESD の実践は、どれも、関わった皆さんが「自分ごと」として取り組んだ成果であり、人々の幸せや平和を築くことに必ずや繋がっているものだと思います。

残念なことに、今年もまた人間の尊厳や安全保障を脅かす出来事がありました。ロシアによるウクライナ侵攻、いまだ終息が見えない新型コロナウイルス感染症、虐待、等々。

しかし、感動的なこともありました！ サッカーワールドカップです。日本代表はベスト 8 という「夢」まであと半歩届きませんでした。吉田麻也キャプテンの「この試合を見る子どもたちがサッカーに夢を感じ、その成長の一端を担えたなら嬉しい」という言葉には、日本がさらに強くなっていくことのほかに、サッカーという文化を持続可能なものにするんだ、という強い意志と期待が表れていると私は解釈しました。今後、サッカーは廃れるはずもないとは思いますが、感動を伴った経験というのは、持続可能な社会づくりにおいても、ものすごいエネルギーやモチベーションになることを、このワールドカップで実感しました。

毎年、クリスマスとともにやってくる「近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会」。それぞれの成果を皆で共有し、子どもも大人も、みんなで感動を分かち合えたらいいなと思います。

2022 年 12 月 25 日

奈良教育大学 学長
近畿 ESD コンソーシアム 会長
宮下 俊也

2022年度 近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会開催要項

1. 目的

学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の幼稚園、小中学校、高等学校でESDの理念に基づく教育活動が展開されつつある。また、持続可能な開発目標（SDGs）への関心が企業やNPOなどの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育および企業等においても、質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、またESDの普及を目的に開催する。

2. 主催 近畿ESDコンソーシアム、奈良教育大学

3. 後援 ASPUniv.Net、ESD活動支援センター、近畿地方ESD活動支援センター

4. 開催日時

2022年12月25日（日）9時50分～17時20分

12月26日（月）9時～13時

5. 会場（対面式）

12月25日（日）：奈良教育大学 奈良教育大学本部・大会議室等

12月26日（月）：奈良教育大学 奈良教育大学本部・大会議室等

6. 日程

【12月25日（日）】

9：30－9：50 受付（奈良教育大学本部）

9：50－10：00 開会行事：管理棟大会議室

全体司会：阪本さゆり氏（奈良教育大学ESD・SDGsセンター研究部員）

挨拶：宮下俊也氏（奈良教育大学学長・近畿ESDコンソーシアム会長）

挨拶：原文絵氏（文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐）

10：00－12：00 ESD子どもフォーラム（発表20分＋講評・移動10分）

司会：中家麻弥さん、山平楓さん、東瑞さん（ユネスコクラブ）

①橋本市立高野口小学校

②奈良教育大学附属中学校

③奈良女子大付属中等教育学校

④大津市立仰木の里小学校

講評：原文絵氏（文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐）

柴尾智子氏（近畿ESDコンソーシアム外部評価委員）

宮下俊也氏（奈良教育大学学長・近畿ESDコンソーシアム会長）

※参加者数が多い場合は、別室にてオンラインで見学していただきます。ご了承ください。

12 : 00 - 13 : 30 昼食休憩

13 : 30 - 15 : 30 ESD 実践交流会 I (発表 20 分 + 質疑 10 分)

【第 1 分科会】(管理棟大会議室)

司会 : 奈良市教育委員会 三木恵介氏

- ①福岡 : 大牟田市立中友小学校 庄山優香氏
- ②鹿児島 : 屋久島町立安房小学校 窪田あずさ氏
- ③熊本 : 菊池市立七城中学校 西田拓人氏
- ④奈良 : 田原本町立田原本小学校 中本篤志氏

【第 2 分科会】(連携教育開発センター大会議室)

司会 : 橋本市教育委員会 木下豪人氏

- ①福岡 : 福岡市立田隈小学校 遠入哲司氏
- ②山形 : 山形市立千歳小学校 阿部大輔氏
- ③企業 : 大和ハウス株式会社 池端正一氏
- ④和歌山 : 橋本市立清水小学校 前田美紀氏

【第 3 分科会】 : (ESD・SDGs センター多目的ホール)

司会 : 彦根市教育委員会 木里聡氏

- ①愛媛 : 四国中央市立三島南中学校 濱崎千華氏
- ②沖縄 : 南風原町立南風原小学校 屋良真弓氏
- ③行政 : 環境省吉野管理官事務所 鶴飼匠太氏
- ④奈良 : 奈良教育大学附属小学校 入澤佳菜氏

15 : 45 - 17 : 00 ESD 講演会 : 大会議室

「ホールシティによる ESD/SDGs の推進とその戦略」

前大牟田市教育長 安田昌則氏

奈良教育大学 ESD・SDGs センター准教授 及川幸彦氏

※参加者数が多い場合は、別室にてオンラインで見学していただきます。ご了承ください。

17 : 00 - 17 : 20 閉会行事

講評 : 柴尾智子氏 (近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員)

長友恒人氏 (近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員)

挨拶 : 中澤静男氏 (奈良教育大学 ESD・SDGs センター長)

【12月26日（月）】

8：40－9：00 受付（奈良教育大学本部）

9：00－10：30 ESD 対談シンポジウム：管理棟大会議室

「ESD への期待と展望 ～ESD ティーチャープログラムを通して～」

沖縄会場：琉球大学 大島順子氏

松山会場：愛媛大学 藤原一弘氏

菊池会場：菊池市教育委員会 音光寺以章氏

屋久島会場：屋久島町教育委員会 下之蘭 崇氏

講評：長友恒人氏（外部評価委員）

司会：大西浩明氏（奈良教育大学 ESD・SDGs センター特任准教授）

10：40－12：40 ESD 実践交流会Ⅱ（発表 20 分＋質疑 10 分）

【第4分科会】（管理棟大会議室）

司会：橿原市教育委員会 葛本雅崇氏

①沖縄：南城市立玉城中学校 新城菜々子氏

②福岡：福岡市立元岡小学校 山本隆一氏

③愛媛：宇和島市立明倫小学校 西原睦美氏

④奈良：奈良市立東登美ヶ丘小学校

山本達也氏、西村翔氏、早川知奈美氏、島田歩実氏

【第5分科会】（ESD・SDGs センター多目的ホール）

司会：及川幸彦氏（奈良教育大学 ESD・SDGs センター准教授）

①鹿児島：屋久島町立永田小学校 吉富祐子氏

②熊本：菊池市立菊池南中学校 大塚大志氏

③奈良：奈良市立平城西小学校 樋口大介氏

④奈良：奈良教育大学ユネスコクラブ 川田大登さん、木下結等さん

【第6分科会】：（連携教育開発センター大会議室）

司会：河本大地氏（奈良教育大学社会科教育講座准教授）

①山形：山形県立高島高等学校 佐藤崇之氏

②愛媛：新居浜市立別子中学校 池田光希氏

③福岡：大牟田市立歴木中学校 原好亮氏

④奈良：奈良教育大学附属中学校 佐竹靖氏、加々見良氏

12：50－13：00 閉会行事

講評：柴尾智子氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

長友恒人氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

挨拶：加藤久雄氏（奈良教育大学顧問・ESD・SDGs センター特任教授）

【ESD 子どもフォーラム】 12月25日(日)10:00~12:00
橋本市立高野口小学校



奈良教育大学附属中学校

奈良女子大学附属中等教育学校



大津市立仰木の里小学校

「十日市のステキ発見隊」として十日市の素敵などところを見つけよう

— 生活科「わたしの町はっけん」の実践より —

庄山 優香（大牟田市立中友小学校）

I はじめに

本実践は、自分たちが住む中友小学校校区に出かけて様々な場所を調べたり、人と接したりする中で、それらに対する親しみの気持ちや愛着を深めるとともに、そこに住む人々の温かさに気づくことができるようになることをねらいとしている。

II 授業実践

所属校（大牟田市立中友小学校）で担任している第2学年の児童33名を対象に、10月から12月にかけて「わたしの町はっけん」と題して実践を展開した。

地域への肯定的な印象を形成させ、親しみや愛着をより深めるために、1回目は「十日市を知ろう」というテーマでひと・もの・ことに着目し探検を行い、十日市には商店街の人が関わっていることに気づいた。これらを踏まえ2回目では「十日市のステキ発見隊」というテーマで探検を行った。このことで、商店街の人々が様々な方法で町を盛り上げようと努力していることを知り、地域の人々の繋がりや温かさに気づくことができた。これらをうけ、十日市を通して知った町の良さや素敵を身近なお家の人に伝えるために、様々な方法を使って伝える活動を行う。今回の実践報告は2回目の「十日市のステキ発見探検」の実践である。

主な学習活動	学習への支援・資料
1. 「十日市のステキ発見隊」として、十日市についての課題を見つけ、今後の活動の見通しとめあてをつかむ。	○単元の見通しとめあてをつかませるために、昔と現在の十日市の様子が分かる写真を提示し、違いに着目して話し合わせる場を設定する。
2. 町探検を通して、たくさんの方が関わっていることや、様々な方法で町を盛り上げていることに気づく。	○地域の実態把握のために、「十日市のステキ」というテーマで、探検したりインタビューしたりさせる。
3. 町の一員として自分達にできることを考え発信する。	○見つけた十日市の「素敵」を伝える方法を考えさせるために、十日市のたくさん「素敵」を提示する。

III 成果と考察

子ども達は、「十日市のステキ発見隊」の活動を通して、地域の人と進んで関わり、お店と自分たち、お客さんとお店、お店とお店など、商店街を核とした地域の人々の結びつきに気づくことができた。また、今まで生まれ育ってきたふるさとを愛する心も同時に育まれてきている。

※具体的な実践の報告や児童の変容、成果と課題については大会当日に詳細を報告する。

校区「安房」について学ぼう！はじめの一步

— 消えてなくなりそうな文化を守りたい —

窪田 あずさ（屋久島町立安房小学校）

I はじめに

本実践は平成18年に鹿児島県指定無形民俗文化財に指定された「如竹踊り」を第3学年総合的な学習の時間において教材化している。「如竹踊り」とは、如竹翁の道徳を後世に伝えようと当時の安房の人々が創作し、命日の旧暦5月25日に永年に亘り踊り伝えてきたものである。「泊如竹翁」とは、安房に生まれ、人の生き方や心の在り方、また、人間性の大切さを説き、仏教や儒教の教えを島民に広め、「屋久聖人（やくせいじん）」と称えられた人物である。かつては、この「如竹踊り」がある日に安房出身の青年は必ず帰省していたというほど重視されていた。その頃は19才から41才までの青年・壮年が踊っていたが、過疎化により若い世代が島を離れて少なくなったため、1966年、「如竹踊り保存会」が結成された。何年も大切に続けてきた踊りであるのにも関わらず、年々存続が難しい状況にある。学習から「如竹踊り」について知る児童が多く、保護者も「如竹踊り」や、由来でもある「如竹翁の教え」について知らない方もいる。

これまで知らなかった「如竹踊り」の価値に気づき、消えてなくなりそうな課題の解決に向けて、児童と共に考え行動していく実践を目指した。

II 実践の概要

第3学年 総合的な学習の時間（全20時間）

- (1) 安房小校歌の歌詞について確認しよう。（見つめる）
- (2) 実際にその場に行って、関わっている人に話を聞こう。（調べる1）
 - ・屋久島観光課「安房 里めぐり」に参加
 - ・個人課題と学級全体課題を確認
 - ・SDGsボードゲームでSDGsについて再確認
- (3) さらに詳しく調べたいことを調べてみよう。（調べる2）
 - ・「安房 里めぐりチーム」を学校に招き詳しく聞く
 - ・「如竹踊り」のまねをしてみる
- (4) お友達に伝えられるようにまとめてみよう。（深める）
- (5) 如竹先生のように私たちも安房の課題を解決するために考えて、私たちは私たちのやり方で行動しよう。（広げよう）

III 考察

「如竹踊り」を教材化し、地域の文化財の保存・継承について探究していくことで、永年続いてきた踊りの価値や地域の方の魅力に気づくことができた。とくに保存・継承に関わる泊氏や川東氏の営みに憧れた児童らは、「僕たちの時代でこの踊りをやめてしまっていけない。踊りを守っていきたい。」と考えるようになり、これから「私たちも踊りを練習してみたい。」や「如竹先生について、この如竹踊りのことをお家の人や周りの人に伝えていきたい。」という行動が生まれている。

「学校を核とした地域づくり」をめざして

— 五者連携によるESD —

西田 拡人（菊池市立七城中学校）

I はじめに

菊池市は、熊本県の北東部に位置し、阿蘇の外輪山を源とする菊池川・合志川の恵みによる「豊かな水と緑、光あふれる田園文化のまち」である。この地域は、古来、市名に名を残す菊池一族の統治による九州の政治・文化の中心地として栄え、政治・教育・文化面において大きく影響を与えており、現在でも多くの遺跡が各地に残っている。江戸・明治期には農業技術先進地として、また良質な米の集散地である商業都市として発展してきた。

菊池市は、SDGs(持続可能な開発目標)の達成に向けて、優れた取組を提案する自治体として、国(内閣府)から「SDGs未来都市」に選定された。「自然を生かし、人をつなぎ、自立発展し続けるまち菊池」を掲げ、持続可能な社会の実現に向けた取組を進めている。

II 「学校を核とした地域づくり」をめざして

- (1) 菊池市は、幅広い地域住民の参画を得ながら、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、五者連携(学校、子供、家庭、地域、行政)による「地域学校協働活動」を進めている。
- (2) 七城中学校は、昭和25年組合立西菊池中学校として発足以来、学校・保護者・地域が一体となった教育実践が行われてきた。新学習指導要領(ESD)や菊池市SDGs未来都市計画を点検軸に、「社会に開かれた教育課程」の再構築を行っている。
※「夢を持ち、自らの力で未来を生き抜く生徒の育成」(学校教育目標)のもと、地域社会への参画をめざした本校の取組を紹介する。

III 実践事例：ESDを視点とした学習指導(2年生社会科「七城町の養蚕」を教材に)

単元名「明治維新」(教育出版)

学習課題：明治維新と七城町の養蚕は、どのような関係があるのだろうか？

- 1 単元の構想(期待される生徒の姿)
 - ・明治政府の諸改革による影響を受ながら、より豊かに暮らそうとする人々の知恵や工夫、努力を理解する。
 - ・世界情勢や政治の動きに関心を持ち、未来社会を予見し構想する。
- 2 教材づくり
 - ・地域学校協働活動推進本部との連携や保護者・地域住民の協力
 - ・「蚕」でつながる人の輪
- 3 授業の実際
 - ・生徒たちが課題を追究、解決していく過程の様子と変容
 - ・持続可能な社会づくりへの参画

「めぐる、めぐみ。」田原本町の水

— 自分たちの川のはたらきを見直そう —

中本 篤志（田原本町立田原本小学校）

I はじめに

「近畿ESDコンソーシアム」の活動の一環として、川上村にある森と水の源流館と協働して行う授業づくりセミナーに参加し、実践を行った。

本実践では、「めぐる、めぐみ。」のポスター（紀の川の上流・中流・河口域の流れから、林業・農業・漁業といった第一産業をつなぐ水の恵みをテーマにしたもの）をきっかけに、現地調査とゲストティーチャーを活用した第4学年の総合的な学習の取組を紹介する。



図1 紀の川じるし「めぐる、めぐみ」のポスター

II 目的

田原本町と川上村の川を散策した経験を通して、2つの川を比較し、水生生物や森林環境、その水を利用している田畑などに関心をもち、自分たちの生活を振り返ることで、人や生き物等、様々な視点にたって思いやりの心を育む。

また、普段の生活を振り返って、持続可能な社会に向けて自分たちができることに取り組み、地元である田原本町に誇りをもてるような子どもを育てる。

III 実践の概要

第4学年 総合的な学習の時間＋社会科の時間

- (1) 水のはたらきについて学習（社会科）
- (2) 水の飲み比べ
- (3) 川上村音無川のフィールドワーク
- (4) 田原本町寺川のフィールドワーク
- (5) 2つの川の違いや役割について学習
- (6) 吉野川分水の歴史を学習（社会科）
- (7) 吉野川分水のはたらきについて学習
- (8) 自分たちができることについて考える。
- (9) 自分たちで考えたことを実践する。



図2 音無川フィールドワーク



図3 寺川フィールドワーク

IV 考察

これまで地元を流れる寺川に対してマイナスイメージが児童も保護者も多かった。（実施したアンケート結果より）しかし、音無川との比較や、実際に川に入って調べることを通して、その印象が大きく変わった。また、吉野川分水のはたらきについても重ねて学習し、地元を流れる川の役割やそのはたらきについて知ること、見方・考え方が変わり、自分たちで川を守っていくためにできることはないだろうか考える姿が見られた。そして、この学習が自分たちの地域を再認識し、誇りをもつきっかけにつながったと考える。

ESDを持続するための学校経営

— 田隈小版ESDの具現化を通して —

遠入 哲司（福岡市立田隈小学校）

I はじめに

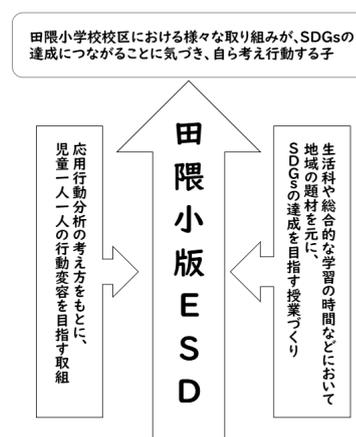
本校は創立114年を迎える歴史のある学校であり、人権教育を柱として、校区の「ひと・もの・こと」を大切にしている教育を積み重ねてきた。このような本校の学習内容はESDと親和性が高いことから、現在ではESDを中心に据え、持続可能な社会の創り手となる子ども達を育てる教育に取り組んでいる。

一方で、現在の学校現場では様々な課題に直面しているのが現実であり、「未来」よりも「現在」の目の前の課題に振り回される状況にある。

II 取組の実際

学校でESDを行うには、まず、学校や学級、担任が持続できることが重要であり、そのためのプラットフォームづくりが大切であると考え、本校では『田隈小版ESD』に取り組んでいる。

田隈小ESDとは、教育活動を通して、子ども達の行動をより好ましいものへと変容させることを狙う教育活動である。内容としては次の2つである。



①「SDGsの達成を目指す授業づくり」

田隈小校区の自治協議会、社会福祉協議会などが行っている様々な取組をはじめとする校区の「ひと・もの・こと」と本校の学習内容をSDGsの17の目標との関りから整理し、生活科や総合的な学習の時間を中心に行う学習。最終的に校区の人々と協働して行くことを目指す。

②「児童一人一人の行動変容を目指す取組」

応用行動心理学、応用行動分析の考え方を元に、子ども達の現在の行動をよりよいものに変容させていくことを目指し、生徒指導、特別支援教育を始め学級経営などにおいて行う取組

III 成果と課題

○「SDGsの達成を目指す授業づくり」を通して、子ども達が校区の「人々の行動のよさ」に気づき、校区の様々な活動への参加者が増えてきた。また、これを通して、地域の人々の学校への信頼が深まった。

○「行動変容」をキーワードに、生徒指導や学級経営に取り組む教員が増え、子ども達の成長を通して取組の価値を実感する姿が見られるようになった。

●田隈小版ESDそのものを持続させる取組の必要性

「平和」について考えよう！

—「平和」という当たり前ではない「幸せ」—

阿部 大輔（山形市立千歳小学校）

I はじめに

本実践は、第6学年総合的な学習の時間において、一人一人の児童が、「平和」とは何かを考え、今後の自分の「平和」に対する意識を高めたり、人のためになることをしたりすることができるようになることを目指した。

自分事として捉えるために、広島市の小学生やユニセフ協会、地域の人から話を聞き、広島市の小学生や地域の人に山形の戦争や「平和」に対する自分の考えなどを伝える。

身近に感じるのが難しい「平和」について考え、児童の生き方に繋げられるようにする。

II 実践の概要

第6学年 総合的な学習の時間（全40時間）

- (1) 身近なことで学びたいことを調べよう。（見つけよう）
 - ・社会科「平和主義」の学習から広島市の「平和学習」を知る。
 - ・ウクライナ情勢から「平和」について関心をもつ。
- (2) 「平和」について調べよう（調べる1）
 - ・広島市立中島小学校6年生とのオンライン交流①
 - ・ユニセフ協会とのオンライン交流
- (3) 山形の「平和」について調べよう（調べる2）
 - ・地域の戦没者遺族会の方を学校に招き、話を聞く。
 - ・個人での調べ学習を学年の学びに繋げる。
□広島の原爆ドーム見学 □祖父が戦時中の疎開について書いた本 □祖父の戦時中の話
- (4) 自分たちが学んだことを伝えよう（深める）
 - ・広島市立中島小学校6年生とのオンライン交流②
- (5) 地域の人に「平和」について話し、地域の未来について考えよう。（広げよう）
 - ・地域の町内会長と民生委員の方を学校に招き、自分が考えた「平和」について話し、地域の未来について語り合う。

III 考察

オンライン交流によって、広島市の「平和学習」、世界で紛争や貧困などにより学校に通えない、安全に生活できない人がいることなどを直接知ることで、児童一人一人が「平和」とは何かを考え、それを実現する態度を育むことができた。

広島市の小学6年生から山形の「平和」を問われたことをきっかけに、山形の戦争があった時代の生活について調べたり、ウクライナ情勢から当たり前ではない生活に気づいたりすることで、「平和」について考え、自分の生き方に繋げることができたと考えられる。

産学協働で取り組むESD

— 「コトクリエ」における探求学習の取り組み事例 —

池端 正一（大和ハウス工業株式会社）

1. 施設紹介

大和ハウスグループ みらい価値共創センター「コトクリエ」は、2021年10月に奈良市西九条町にオープンした施設である。この施設は、子どもたちから大人まで、あらゆる世代が共に学び、考え、成長する場であり、みらいの価値を共創する、みらい価値共創人財を社会と共に育てる場として機能している。社員研修の会場として利用されるだけでなく、あらゆる人に開かれた施設となっている。世代や立場の違いを超えて多くの人が集まり、交流して生態系のように影響しあい、共に価値を生み出す場所「森の会所」として、ここで行われる学びは「知る～学ぶ～考える～創る～生きる」を多くの人と共有しながら成長から進化することで、世の中に役に立つ人財育成を目指している。

2. 特色のある取り組み紹介

（1）奈良女子大学附属中等教育学校

・家を創るために必要な技術・環境・風土を知ることから始め、現地を調査（京終駅・新駅（大安寺）周辺を直接感じることで街づくりにも挑戦したSSH授業。

（2）奈良女子大学附属小学校

・コトクリエの設計思想と現場（施設・住宅展示場）から、知る・学びを実施。子供達の自由な表現で理想の住まいを創る。（模型等で表現）

（3）奈良市立一条高等学校附属中等学校

・理想の家をテーマにした、STEAM教育への取り組み。理想の家を考える時、義務教育で学んだことを十分活用できる。全6教科の先生から思考のヒントを学び、それを形（3D等）にすることで柔軟な発想力を探求する。

（4）奈良市立辰市小学校

・FURUSATO MIRAI MEETING

辰市小学校、椿井小学校、屋久島町立神山小学校による各学校のESD取り組み報告会及びパネルディスカッションにより全国の学校と連携。（体験型探求学習）

・施設を活用した、SDGs・防災・万葉の庭での和歌詠み・施設眺望での街観察。

3. 目指すべき協働のかたち

（1）地域連携による企業版ESD

サードプレイスとして地域の方々に学びの場やプログラムを提供する。暮らしに密着した課題や驚きの解決をステークホルダーと連携して真実を知るところから始め、共に考え・共に学び・共に創ることで持続可能な学びの場を造ること。そのために、産業界と教育現場が協働することで学びの面白さや世の中に貢献できる人財を育成することで、共に生きることを一緒に構築することを目指しています。

e顔 e街 e地球プロジェクト

— 地域や地球に自分たちができること —

前田 美紀（橋本市立清水小学校）

I 学校紹介

清水小学校は、紀ノ川の南側に位置し、校区には旧高野街道の街並みや数多くの史跡、世界遺産（黒河道）、そして、国の伝統的工芸品に指定されているへら竿工房がいくつもある、創立113年の歴史を持つ学校です。近年の児童減少のため児童数が61名、4・5年生は複式学級となっている小規模校です。

地域の皆さんは大変協力的で、子ども達はそれぞれの学年で他では経験できないようなことをたくさん体験させてもらっています。地域に育てられている学校と言えるでしょう。



II 実践内容

(1) 地域とともに

・農業体験

地域の方に様々な農業体験をさせてもらっています。

（柿・はたごんぼ・さつまいも・米等）

・地域の先生・感謝の集い

昔遊びや竹細工・イラスト・編み物・柿渋染め・グランドゴルフ等それぞれの学年が地域の方に伝統文化や技を教えてもらいます。そして、お世話になった方に「感謝の集い」でお礼の気持ちを伝えます。

(2) 自分たちの手で

・世界遺産について学習をし、黒河道の入り口の草刈りと、女人道の道普請をしました。もっと世界の人達に来てもらえるようにするために何ができるか考えています。

・児童会が中心になって、節水・節電など環境を守るために自分たちができることを考え、取り組んでいます。

(3) 憩いの場作り

・高野山での森林体験で学んでことをもとに、鳥が集まるように巣箱を作ったり、花をいっぱい植えたり、木々にネームプレートを付けたりして、学校を憩いの場にしていこうと考えています。

III 取り組みを通して

子ども達は、地域のすばらしさを実感しています。そして、地域の方に出会うとニコニコ顔になります。地域の方も、子ども達と出会い、いろいろ話すと、元気になると言ってくれています。「来年まで技を磨いておきます。」とおっしゃってくださる地域の先生もいます。本校の取組は、未来を生きる子達だけでなく、地域の方々の生きがいにもなっていることが嬉しいです。

四国中央市が誇る紙産業

濱崎 千華（四国中央市立三島南中学校）

I はじめに

四国中央市は愛媛県の東端に位置し、他の3県（香川県、高知県、徳島県）に接している。明治時代の和紙作りから始まり、現在は「お札と切手以外は手に入る」と言われるほど、紙製造が盛んに行われている。そんな四国中央市では、子どもたちの紙への関心を高め、将来の紙産業を担う人材を育てたいという思いから、中学生を対象に「ものづくり体験講座」が行われており、本校の1年生もこのプログラムに参加し、学びを深めてきた。学習前から、生徒は四国中央市が「紙のまち」と言われていることを知っており、海沿いに工場が多く並んでいることも知っているが、なぜ「紙のまち」と言われるのか、工場でどんなものを製造しているかは知らなかった。この学習を通して、課題を解決する力や、自分のふるさとを誇りに思い、伝えていこうとする意欲を育てたいと考え、この単元を設定した。

II 学習の内容

聞く	1. 四国中央市の紙産業の歴史を学ぶ。 2. 紙づくり産業とその技術を学ぶ。 3. 紙の機能や新素材を学ぶ。
見る・知る	4. 製紙会社に工場見学へ行く。 5. 紙加工会社に工場見学へ行く。
体験する	6. 「紙のまち資料館」を訪れ、手漉き体験をする。 7. 水引細工を作る。
発信する	8. 学んだことを模造紙にまとめ、発表する。 9. 活動の振り返りをする。

III まとめ

「聞く」講座では、紙産業が発展してきた歴史を学び、自分たちが住むまちを誇りに思う気持ちを高めることができた。また、新素材の開発に携わっている方の話を聞き、紙製品の未来を考えるきっかけになった。

「見る・知る」講座では、原料から紙を作り、製品になって手元に届くまでの工程を実際に見ることで、その技術の偉大さを感じていた。企業の方から、出荷額を上げるために行われている工夫を教わったり、環境に配慮した設備や持続可能なものづくりを教わったりして、製造や販売業に興味を持った生徒もいた。

「体験する」講座では、実際に紙の原料からハガキを作る「手漉き体験」を通して、自分で紙を作る楽しさを感じ、先人の知恵に触れることができた。

今後はこの学習で学んだことを実生活に生かしたり、ふるさとの未来を考えたりする活動につなげていきたい。

沖縄から見るSDGs

— 深く掘れ己の胸中の泉 餘所たゆてい 水や汲まぬごとに —

屋良 真弓(南風原町立南風原小学校)

1 地域の歴史を学ぶ機会を

「沖縄がアメリカだったってどういうこと!？」児童からの声でした。今年沖縄は、復帰五十年の節目を迎えましたが、沖縄が米軍統治下に置かれていた歴史を知らない子がほとんどでした。唯一の地上戦が行われた沖縄県は「その惨禍を繰り返さないために」と、慰霊の日がある六月を中心に平和学習が県内各地の学校で行われます。最近では、その平和学習の在り方について、議論されることも多くなりました。地元紙には、「慰霊の日が何の日が知らない子供たちも少なくない」「沖縄が復帰した日を知らない高校生が約7割」などと取り上げられたりもしました。沖縄の歴史について沖縄の子供たちが知らない、という事実に関心を感じた事は正直な感想でした。米軍統治下に置かれた沖縄から日本国への復帰を目指した活動や、そもそも沖縄戦のことを学ぶことは「命」や「人権」に深くつながっていきます。「人間らしく生きるとはどのようなことか」について考える材料が、沖縄にはたくさんあります。過去の沖縄の人たちがどのように生きてきたのか、何を訴えてきたのかを知ることは、命の大切さや自らの人権感覚を磨くことにつながり、子供たちにとって大切な学びとなります。その学びこそ、SDGsや開発教育の理念そのものであると私は考えます。本校5年生では、総合的な学習の時間のテーマを「身近な社会を“持続可能な社会”にするために。～SDGs めがねをかけたなら～」と設定して授業を進めているところでしたので、復帰50年の節目をきっかけに、沖縄の戦中・戦後史を学ぶいい機会になると考えました。今回特に意識したことは、多くの交流の中で様々な「平和」についての考えに触れることでした。授業形態を、参加型の手法を用いて主体的で対話的なものになるように工夫しました。教育の内容だけでなく、その方法も重視し、学習結果と同じように学習過程についても、大切に考えました。仲間や地域の方々との交流、資料との対話など、一連の学習流れに様々な要素を織り込みました。

2 学校の学びを地域で深める

地域の博物館で復帰五十年の企画展関連イベントが行われ、学年から有志が学校代表として参加しました。各グループに地域の方々も入り、ワークショップが行われました。学校で学んだことをいかして盛んに議論が繰り広げられました。マスメディアでその様子が取り上げられたことにより、来館者が増え企画展期間が延長になるほどでした。子供たちが真剣に学び考える姿が地域の大人たちに、いい刺激を与えていると感じる出来事でした。学校がこれまで以上に地域とのパートナーシップを図っていくことの重要性を実感しました。

ワークショップの様子①



ワークショップの様子②



3 おわりに

このようにSDGsのフレームを通して現代的課題について考えることは、地域との関わりに依るところが大きいと感じます。地域を見つめ、向き合うことこそが、社会的課題の解決に向けた行動の第一歩となると考えます。「深く掘れ己の胸中の泉、餘所たゆてい水や 汲まぬごとに」沖縄学の父と言われる伊波普猷がニーチェの言葉を沖縄語にした琉歌です。地域の宝に気づき、そこから学ぼうとする力を少しずつ養っていきたいと思います。平和の形は多様です。「人間らしく生きる事」「命の大切さ」などについて、じっくりと考えた子供たちが、どんな“自分なりの答え”を探してくるのか楽しみです。

吉野熊野国立公園大台ヶ原における環境教育の検討及び ユネスコエコパークの地域教育活用について

鵜飼 匠太（環境省吉野管理官事務所）

I はじめに

吉野熊野国立公園の大台ヶ原は、日本有数の豪雨地帯で豊かな野生動植物からなる生態系が見られる。当該地区では昭和30年代からの森林衰退を受けて、森林生態系を再生するための大規模な自然再生事業が進められている。また当該地含む周辺地域は大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパークに指定されている。



しかしながら、上記自然再生事業成果やエコパークを活用した教育利用十分に進められていないことから、現代の教育課題や地域振興の観点から新たな教育利用の検討を行った。【写真：大台ヶ原とトウヒの立ち枯れ】

II 実施内容と結果

(1) 現地教育資源の整理

大台ヶ原で見られる環境資源(野生動植物など)や事業成果(植生回復状況、防鹿柵)等について教職員向けに現行教育課程の各単元との対応関係を整理。

(2) 環境教育プログラム案の作成。

上記結果を踏まえ現役教員や有識者、地域ガイドを交えた意見交換会を行い、大台ヶ原で想定される教育プログラムを検討。

(3) エコパークを活用した教員向けエクスカージョンの実施

大台ヶ原をフィールドに地域教育関係者を地元ガイドが案内し、ESDや地域教育を考えるエクスカージョンを実施(エコパーク協議会主催、環境省共催)。令和4年8月に開催し30名近くが参加。

＜事業を進める上で重要視する観点＞

- ・現代の教職員課題（授業づくり時間の不足など）を踏まえた情報整理
- ・地域ガイドの活用など地域振興への寄与
- ・当該自然資源を有する地域における教育利用の優先

III 考察、今後の展望

大台ヶ原における環境教育の検討では、自然再生事業の取組成果など多くの教育資源が整理されたほか、人為的な保全行為に対する倫理観や地域関係者とのキャリア教育など教育利用上の新たな観点が発見された。引き続きHP上での事前・事後学習資料の整理など教育セッションの観点を含めた取組を進める。

教員向けエクスカージョンでは、地域教育推進におけるエコパークの活用可能性が示された。今後、地域内で開催地を持ち回り、通年開催するようなエコパークを活用した地域教育推進体制の構築を目指す。

平和な世界をつくるために

— 被爆建物の保存を考える —

入澤 佳菜（奈良教育大学附属小学校）

1. はじめに

「日本は平和でよかったですと思います」「世界が平和になってほしいです」

このような言葉にたくさん出会ってきた。どこか他人事の子どもたちに、このままでいいのかと悩むことも多い。平和学習では「事実に出会わせる」ことと、「平和のために行動する人に出会わせる」ことを大切にしたい。戦争での被害や加害の事実を学ぶこと、その学びの上に平和をつくることまで考えたい。「平和が大切」という定型文を言うことではなく、自分で考え、行動することを大切にしたい。平和について考えることは、自分の生き方を考えることであり、社会をつくることにもつながっている。6年生では社会科の学習で歴史や憲法について学ぶ。その学習とともに、総合的な学習の中での平和学習を通して、「社会のつくり手」としての自分に出会うことをめざしたい。今回は、1学期にヒロシマ修学旅行で訪れた旧陸軍被服支廠（広島市南区出汐）を、3学期に平和のための行動を考える題材として再度取り扱うこととした。

2. 被爆建物の保存

旧陸軍被服支廠は、爆心地から約2.7km離れたところにある。原子爆弾の爆風の威力で鉄の扉が曲がってしまい、今なお曲がったままの鉄の扉が残されている。現存する貴重な被爆建物である。本校の修学旅行では、当時その場所で被爆された中西巖さんに「私はここに立っていたんです」と被爆体験を聞かせてもらっている。現存する4棟は、3棟を広島県、1棟を国が所有している。

長い間、保存するかどうかが決まっていなかったが、2019年2月広島県が被服支廠を1棟外観保存し、2棟解体するという方針を出す。老朽化しているため耐震工事が必要だが、84億円かかるという理由だった。3か月前の2018年12月には、見学者用の建物をつくり平和学習の拠点にする改修案が出されていたが、一転解体が決まってしまった。

被爆建物の保存について、子どもたちは原爆ドームとレストハウス（旧大正屋呉服店）のことを知っている。それらは、遠い昔のことだ。戦後70年以上たった今も、被爆建物を保存するかしないかという問題があることは驚きだった。「今」の問題として、「当事者」として、子どもたちと考えて話し合った。その様子を報告したい。

※2021年5月に、広島県は方針を変更し、3棟とも耐震化することを決定した。たくさんの人たちの声、行動によって、保存が実現するのである。その行動に出会うことも子どもたちにとって学びになると考えている。

【ESD 講演会】 12月25日(日)15:45~17:00

「ホールシティによる ESD/SDGsの推進とその戦略」

講師:前大牟田市教育長 安田昌則氏

奈良教育大学 ESD・SDGs センター准教授 及川幸彦氏

【ESD 対談シンポジウム】 12月26日(月)9:00~10:30
シンポジスト

- ・大島順子氏(琉球大学)
- ・藤原一弘氏(愛媛大学)
- ・音光寺以章氏(菊池市教育委員会)
- ・下之蘭崇氏(屋久島町教育委員会)

音楽文化を創造する生徒の育成 ～ 音楽鑑賞とESD for SDGs ～

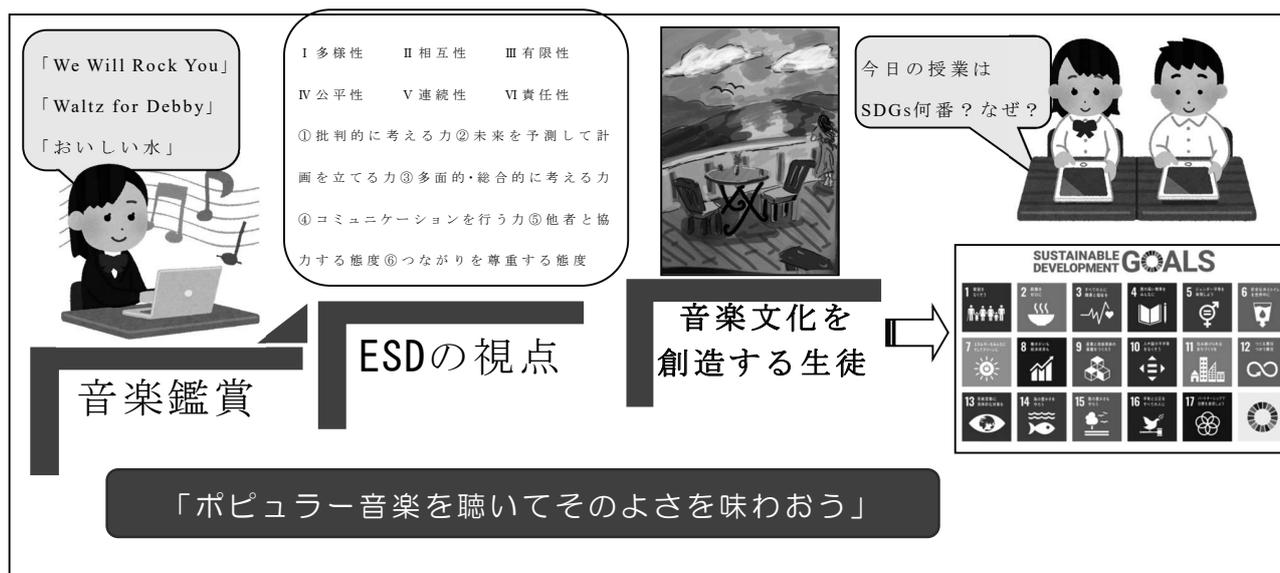
新城 菜々子（南城市立玉城中学校）

1 研究テーマについて

これまでの実践を振り返ると、SDGsについて委員会活動等で啓発活動を行ってきたが、教科指導も含めさらに取り入れていきたいと考える。また、音楽の持つ多様性や、人が感情を伝え共有するために音楽を通したコミュニケーションがある等の音楽文化について授業で取り扱うことが不十分であったため、音楽に対する価値意識を広げたり音楽文化の豊かさを感じさせたりすることに課題がある。

そこで本研究は、ポピュラー音楽を題材としてESDの視点から様々なつながりを大切にした音楽鑑賞を行い、ESDの視点に立った音楽鑑賞を行うことで、音楽文化を創造する生徒が育成されるだろうと考え、本テーマを設定した。

2 研究の構想と指導の実際



3 研究の成果

- (1) 音楽は、人々や社会との結びつきがあるというESDの視点に立った音楽鑑賞を行うことで「つながりを尊重する態度」が育ち、人々の生活における「音楽の役割」について自分なりの考えを持つ生徒が育成された。
- (2) 生徒の感受したことを基に音楽のよさを自由に表現する活動を取り入れたことで、画像・絵・体の動きや文章等多様な表現で音楽文化を創造する生徒の姿が見られた。
- (3) 全授業でICTを活用することで、生徒一人一人が好きな曲の聴きたい部分をじっくりと鑑賞したり、ベン図を用いて楽曲やジャンルの成り立ちについて理解したり、自分のイメージする画像を検索することに役立ち、生徒の多様な表現につながった。

6年生総合的な学習の時間 「私の平和宣言」

— ひとりひとりにできることを見つめて —

山本 隆一（福岡市立元岡小学校）

1 はじめに

本校の児童は素直で優しく、思いやりを持って行動できる児童が多い。平和に対しても、大切にしたいという認識を持っているが、平和を身近なところに置き換えて考えたり、自分のこととして考えたり、何か行動に移そうとしたりするまでには至っていない。

本教材は修学旅行での平和に対する学びや被爆体験者や社会問題を解決するために起業された方の話を聞くことで、今までの小学校生活を振り返り、これからの自分について考え、様々な立場の人の気持ちを思いやること、社会問題に目を向け、主体的に関わり、解決していこうという心情を育てていくことをねらいとしている。

2 授業実践

【単元目標】

- 被爆体験者の方の話を聞いたり修学旅行で長崎の町や平和の取り組みについて調べたり、社会問題を解決しようとする方の話を聞いたりする中で、平和に対する人々の思いや願い、平和の大切さについて理解する。（知識・技能）
- 被爆体験者の方や社会問題解決に取り組まれている方の話を聞き、人々の思いを大事にしながら、自分の生き方を見つめる。（思考・表現・判断力）
- 世界の平和のために身近な社会に目を向け、自分たちにできることを主体的に考え、行動しようとする心情を持つ。（主体的に学習に取り組む姿）

【学習の流れ】

- 1 長崎の平和の取り組みについて調べよう（修学旅行の取り組み）
 - ・長崎の平和に対する想いについて調べる。
 - ・被爆体験者の方の講話を聞き、語り続ける想いについて考えを深める。
- 2 世界の平和の取り組みについて調べよう。
 - ・世界の現状について調べ、平和な状態とはどのような状態なのか考える。
 - ・国連やユニセフ・JICAの活動について調べ、平和と社会問題を結びつける活動。
 - ・平和について、国家・市町村・企業・個人の取り組みについて調べる。
- 3 自分にできる平和の取り組みについて考えよう
 - ・修学旅行のまとめから、平和の大切さについて考えを深める。
 - ・社会問題の解決を目指す起業家BorderlessJapanの田口さんの話を聞き、一人一人の考え方や行動が世界の平和につながることを知る。
 - ・自分にできる取り組み「私の平和宣言」を作り発表する。

3 まとめ

- 【平和の尊さ】【戦争の悲惨さ】だけではなく、平和を願う人々の行動がたくさんあること、国家・企業・個人でできることがそれぞれにあること、平和な世界とは戦争がない状態ではなく、SDG'sを含めた社会問題が解決された未来であることに気づくことができた。
- OGTの話から、一人一人の行動が世界平和につながることを意識し、自分にできる行動について考えを深めることができた。

わたしにできることって何だろう

小学校6年生家庭科「持続可能な社会に生きる」の実践より――

西原 睦美（宇和島市立明倫小学校）

I はじめに

本校は、愛媛県宇和島市の中心部に位置した全校児童469名の中規模校である。本校のグランドデザインに明記している「SDGsへの取組」を受け、校内研究にも「ESD推進のためのカリキュラム・マネジメント」を取り入れている。しかし、取組は始まったばかりで、今後、どのように展開していくか模索している段階である。そんな中、今回、「ESDティーチャープログラム」に参加し、自分自身がSDGs、ESDに関する理解を深めることができた。今回の学びを通して、実践した授業について紹介する。

II 授業実践の概要

■第6学年 家庭科「持続可能な社会を生きる」（全4時間）

教科書では最後の単元に位置付けられ、年間指導計画では4時間扱いとなっている内容である。しかし、児童が家庭や学校での実践を通して、継続した取組から学びを深めていけるようにしたいと考え、2学期（9月、10月、11月）に単発で授業を進めながら、授業実践を行った。

- (1) 生活の中の問題・課題を考える。（見つめる）
「今、わたしたちの生活の中でどのような問題が起きているのだろうか。」
- (2) 資料や学習内容から、自分にできることを考え、実践する。（調べる）
「持続可能で自分にできそうな取組を考え、実践しよう。」
- (3) 各自の取組の報告やまとめを行う。（深める）
「実践した持続可能な取組について報告し、まとめよう。」
- (4) 「エコ仲間」を広げるための活動内容を考えたり、身近な人たちの取組を知ったりする。（広げる）
「エコ仲間の輪を広げよう。」

■ESDとの関連

- 【SDGsについて】12. つくる責任つかう責任
- 【ESDの視点】有限性 公平性 責任性
- 【資質・能力】クリティカルシンキング 長期的思考力
コミュニケーション力 協働的問題解決力
- 【価値観】世代間の公正 自然環境・生態系の保全を重視する

III 考察

授業で扱った学校の電気や水道量、市のごみの量の推移をまとめた資料は、児童が「消費」を意識するきっかけとなった。また、「100エコポイントを貯めよう」「合言葉を作ろう」という活動は、児童の実践意欲を高め、継続した取組につながった。この取組から「つかう責任」を意識した様々な感想が見られ、児童の行動や意識の変容を感じた。今後は、今回の取組が、児童一人一人の意識に残り継続されること、また、家庭や周囲へ広がるとともに、カリキュラム・マネジメントにより、学びをどのように広げ、深めていくか検討が必要である。

一人一人が学びを確かめ、思いや考えをつなぐ授業づくり

— 奈良県の伝統工芸品を未来へつなげよう —

山本達也 島田歩実 西村翔 早川知奈美（奈良市立東登美ヶ丘小学校）

I. 研究主題との関わり

本学習は、児童が奈良県の伝統工芸品についての関心を高め、長く続く伝統文化を次世代へ受け継ぐことを目的に、児童の意識と行動の変容を促すことを目指すものである。

本学習で取り上げる奈良県の伝統工芸品は、五つ。奈良墨、高山茶筌、奈良筆、赤膚焼、奈良団扇である。工芸品に触れること・職人に出会うことを通し、児童にとって身近な存在になり、奈良県の伝統工芸品を大切にしていきたいという次世代の担い手意識がより高まると考える。今回は、五つの伝統工芸品の中で、奈良墨に焦点を当て、伝統工芸を広める行動に取り組んでいくことを通して、本校の研究主題「一人一人が学びを確かめ、思いや考えをつなぐ授業づくり」を目指した。

II. 研究の視点

第一次では、まず、奈良墨を使ったにぎり墨体験を行う。奈良県の伝統工芸品奈良墨を児童にとって身近なものにさせることがねらいである。さらに、奈良墨について聞きたい質問を職人にオンライン授業で答えてもらい、奈良墨について深く知っていく。その後、他の伝統工芸品（高山茶筌、奈良筆、赤膚焼、奈良団扇）の職人の話を通して職人の思いや課題・魅力等を学んだ。

第二次では、奈良墨が売れていないことに気づき「自分なら奈良墨を買うか。」を問いに設定し話し合った。奈良墨の良さや課題等が出てくる中で、奈良墨を未来に受け継ぐためには、たくさんの人に奈良墨の良さを知ってもらうことが必要であると気づかせた。そして、奈良墨の良さを広めるためには、どうすればよいのかを考えさせた。

第三次では、「伝統工芸を広めるために私たちにできることを考えよう」という問いのもと、職人へのプレゼン大会の後、奈良墨の墨匠と児童が相談を重ねながら、児童が考えた奈良墨を広めるための取り組み（パンフレット作り・校外イベント作り・新商品作り・校内イベント作りetc.）を形にするために活動する。奈良墨を広めるための行動を考え、アドバイスをもらいながら、より良いものに改善していく。最後に、報道資料を作り、メディアを活用すると経験をさせたい。本学習で得る見方や考え方を今後の場面でも生かせるようになってもらいたい。奈良県の伝統工芸品（奈良墨）を深く探求していく本学習を通して奈良県の魅力の一つに伝統工芸があり郷土愛を深める一部になってほしい。

III. 研究の成果と今後の課題

本実践では、職人と関わりや工芸品との触れ合いを増やすことで、伝統工芸品を身近なものとして捉え、次世代に受け継ぐ方法について主体的に考え取り組むことができた。プレゼン大会や報道資料を作ることを通して、自らの発信力を磨く経験をし、持続可能な社会の担い手として今後の場面でも生かせるようになってほしい。

人・自然・地域に学び，屋久島に誇りを持ち， 未来へ夢や希望をもつ永田っ子 ― 水と共に生きる ―

吉富 祐子（屋久島町立永田小学校）

I 学校紹介

永田岳を背景に眼前には永田の浜，そして近隣を流れる雄大な永田川に見守られた自然豊かな本校。「いなか浜」や「前浜」は，ラムサール条約登録地で，ウミガメの産卵地としても有名である。

子どもたちにおいては，「独り立ちできる子ども」を目指し，「かしこく・やさしく・たくましく」を校訓として，少人数完全複式学級の中，一人一人が主役となり，勉学に勤しんでいる。

また，屋久島町を実施主体として，他都道府県・他市町村の小学生が，自然豊かな永田に居住しながら永田小学校に通学する「かめんこ留学制度」を実施している。

II 実践の概要

本単元「水と共に生きる」は，世界自然遺産の島，屋久島の魅力について，体験活動や土面川調査，環境アドバイザーの指導を根拠に，水を通して追究し，現在及び将来にわたって美しい水（環境）を保全させていくための，郷土愛を育むことを目指す単元である。

また，ICTを活用して，町内の学校をオンラインでつなぐことで，より多くの方に自分たちの住む地域の魅力を伝える機会を確保しながら，情報の収集能力や活用能力の育成にもつなげる学習に位置づけられる。

III 学習の流れ

第3・4学年 総合的な学習の時間（全25時間）

- (1) 永田の行事・活動を想起し，課題を発見する。（つかむ）
- (2) 目的を明確にし，調査の計画を立てる。（見通す）
- (3) 調査計画に従って情報を収集する。（調べる）
- (4) 情報を選択しまとめる。（まとめる）
- (5) 取り組みを発信する。（発信する）

III 考察

屋久島は素材の宝庫であり，子どもの発想は大人を上回ることもある。主体的・対話的で深い学びの中でこそ人間性や各能力が磨かれていくことを，改めて評価することができた。そしてSDGsの達成を踏まえた探究課題を設定することでより高まることを確認した。今後も「学び，考え，行動する力」と「自尊感情」を高め「生きる力」を育成していく屋久島型ESDを推進していく。

菊池市立菊池南中学校ESDの取組

大塚 大志（菊池市立菊池南中学校）

1. はじめに

菊池南中学校は、令和元年・2年度に、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業として、ESDの研究に取り組んだ。指定後も継続してESD・SDGsの研究に取り組んでいる。SDGsの17のゴールに着目し、委員会を14に分け、それぞれSDGsのゴールに関連した活動を行っている。さらに、地域学校協働推進員の協力のもと、企業・行政との連携やゲストティーチャーの確保がスムーズになることで、委員会活動の幅が広がり、より地域と協力した委員会活動が行われている。

また、校内での研究授業を通して、学習構想案の中に「身に付けさせたい能力・態度」や課題解決のために働かせる「持続可能な社会づくりのための構成概念」、「関連するSDGs」を明記することで、ESDの視点での授業改善と実践を行った。

2. 実践内容

（1）地域学校協働活動推進委員と連携した委員会活動について

委員会活動の際に、専門の講師を地域学校協働活動推進委員に紹介してもらい、ゲストティーチャーとして派遣してもらい、専門的な助言をもらいながら活動を行った。例えば、安全委員会による、地域の安全マップを作成する際には、防災士の方を講師として派遣してもらい、自分が住んでいる地域での危険箇所の確認ポイントや情報を発信する際のまとめ方などのアドバイスをもらいながら活動を進めた。他にも様々な委員会において、ゲストティーチャーによる専門的な活動が行われている。



また、授業においても理科の授業において、放射線の内容を取り扱う際に、放射線技師にゲストティーチャーとして来ていただき、専門的な視点で講話をしていただくなどの取組も行っている。

（2）ESD・SDGsの視点を取り入れた授業改善

校内研修を通して「持続可能な社会づくりの構成概念」や「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の共通理解を図り、学習構想案に明記するようになった。研究授業では、教科の枠を超えて意見交換をすることで、他教科の視点からの改善点や工夫できる点などを考えることができた。

すごい！すごーい！！を伝えよう

— オンラインが生み出す地域とのつながり —

樋口 大介（奈良市立平城西小学校）

I はじめに

本実践では、地域のすごいに出会うことを主な活動としている。地域のすごいを見つけるために「まちたんけん」を行なった。しかし、児童は「すごい」と思うものを見つけられなかった。そこで、地域に詳しく人から話を聞くことにした。地域の「すごい」を、放課後子ども教室でお世話になっている福山さん、立哨でお世話になっている山本さん、永廣さん、秋篠川源流を愛し育てる会の青島さんの4人から教えてもらうことにした。地域の人と出会うことを通して、地域の「すごい」に気づくとともに、地域の人や場所を大切にする気持ちや地域に積極的に関わろうとする気持ちを一層強くもつことにつなげることを目指している。学んだことを隣接する校区の平城小学校の2年生とオンラインで発信することで、さらに地域の「すごい！」を実感できる機会とした。

II 単元の構成と学習の流れ

- (1) 二学期の生活科の学習の見通しをもつ。～4つのテーマを確認～
「まちたんけんに行こう！」・「6年生にきれいな花をとどけよう」
「1年生をおもちゃランドにしょうたいしよう」・「秋見つけをしよう」
- (2) 学校の「すごい」を伝えよう。～平城小学校にオンラインで伝えよう～
- (3) まちの「すごい」を見つけよう。～まちたんけんに行こう～
- (4) まちの「すごい」を調べよう。～地域の人に聞いてみよう～（実践中）
- (5) まちの「すごい」を伝えよう。～平城小学校にオンラインで伝えよう～

III 現状の考察と今後の展望

実践するにあたり、「すごい」を伝えたいという気持ちを児童がもてるようにすることが課題になるだろうと考えた。1学期の生活科で学校の「すごい」を1年生に伝える活動を行なった。その際、「保護者には伝える気がしない」と児童は考えていた。その理由として、保護者は「すごい」を知っているだろうと児童が考えていたためである。そこで、本実践では、隣接する校区の平城小学校とオンラインで交流することで、「すごい」を伝えたい気持ちの向上を目指した。1年生に伝えるときとは異なり、学校の「すごい」を誇らしげに語る姿や、伝えた後に学校の施設を大切に使おうとする姿に行動の変容が見られた。

地域（まち）のすごいを発表する際にも同様の姿と行動の変容が見られると考えている。しかし、児童は、まちのすごいを伝えたいが、見つけることはできなかった。児童は、地域の人に関わることで調べようとしている。オンラインでの交流を通して、高まった児童の伝えたい気持ちが、実際に地域に関わり、愛着をもとうとする姿や態度につながっていると考えられる。

2022ユネスコクラブの取り組み

— 社会教育施設、商業施設での実践事例を中心に —

川田 大登・木下結等（奈良教育大学ユネスコクラブ）

I はじめに

奈良教育大学ユネスコクラブはESDを実践できる教員になること、ESDを楽しく追究することを目的として活動している大学公認サークルである。今年で創立12年目を迎え、部員は99名と、3桁目前となった。

活動は大きく三つに分類できる。一つ目は、ESDを勉強することである。主に、奈良教育大学で開かれているセミナーや講座に声を掛け合って参加したり、その運営の補助をしたりしている。また、学生主催で防災に関する勉強会も行っている。二つ目は、他のユネスコクラブと連携し、ともに活動を高め合う活動である。そして、三つ目はESDを実践したり支援したりする活動である。具体的には、野外活動の支援をしたり、イベントに出展したり、出前講座を行ったりしている。本発表では、今年度、商業施設であるイオン登美ヶ丘店と、奈良市立富雄公民館で行った実践を取り上げる。

II 奈良市立富雄公民館での実践

8月6日（土）奈良市立富雄公民館において、「大学生とワークショップ SDGs」を行った。対象は小学生である。ここでは、身近なお寿司を事例として、100年後、地球環境を守るために、自分たちにどんな地球温暖化対策ができるかを考えた。最後には、「SDGs13 気候変動に具体的な対策を」について考えたという認定証を授与して、SDGsを認識してもらった。

III イオン登美ヶ丘店での実践

9月24日（土）イオン登美ヶ丘店において、「大学生に学ぶSDGs～木に親しむ～」と題したワークショップを行った。対象は小学生である。バードコールと鹿の折り紙という二つの活動があり、バードコールは木材の工作を通して木に親しむこと、それを使って、ワークショップ後にも鳥や森と親しんでもらうことを狙って製作した。また、森について考える事例として、春日山原始林と鹿の関係を考えた。その記念として、鹿の折り紙を折って、ワークショップを終わった。

複数回実施したため、子どもと保護者を合わせて50名程度の方に参加して頂けたが、場所や時間といった様々な制約があり、イオンへの出前授業ならではの難しさを感じた。



1. イオンでの製作物

IV おわりに

今年は新型コロナウイルス感染症の影響が比較的小さくなり、制約はありつつも、コロナ禍前の活動や新たな対面の活動ができるようになった。今年の経験を来年度のますますの活動推進につなげていきたい。

教科授業×分子生物学×高畠町×生物多様性

— 高校生物でのESD実践 —

佐藤 崇之（山形県立高畠高等学校）

I はじめに

私は、2021年にESDについて知る機会を頂き、多くの先生方の発表をお聞きし、ESDの実践について知識を深めてきた。その中で「高校の事例」や「通常の授業内でESDの活動を取り入れた事例」が少ないと感じた。そこで私は普段の授業内でESDを取り入れて実践すべく、ESDの視点を設けた単元を作成した。単元の中には、ESDの活動やDNAを使った分子生物学の実験を組み込み、生物多様性についての考えを深めながら行動変容を促すべく授業を実践した。また、西岡加名恵氏の提唱する「パフォーマンス課題」を取り入れることで、多様な答えを発信できるように工夫した。

II 単元計画

授業時間	内容
1、2	○単元のゴール（パフォーマンス課題）の提示 ○資料から生物多様性、多様性を低下させる要因についての読み取り ○在来種と形態的に類似して区別がつかない外来種についてDNAの塩基配列の違いによって判別できることの説明
3、4	○電気泳動槽の作製
5、6	○エタノール・高塩溶液を使ったDNAの抽出 ○電気泳動法による抽出したDNAのバンドの可視化
7、8	○パフォーマンス課題のシナリオ考案（個人） ○3人グループによる紙芝居のシナリオ作成。
9、10	○紙芝居の製作
11、12	○製作した紙芝居の発表

III 成果と課題

成果

- ・生徒が主体的に活動に関わり、教員の想像を超えた紙芝居を作ったこと。
- ・自分達が暮らす地域の生物多様性について考えることができたこと。

課題

- ・学校外の方から話を伺うだけに留まってしまったこと。
- ・生徒の行動変容をさらに促す必要があること。

共に野菜をつくることで、共に未来をつくる

— 地域協働型農業体験学習「別子ファーム」の実践 —

池田 光希（新居浜市立別子中学校）

I 「別子ファーム」のはじまり

本校が位置している別子山地域は、過疎という地域課題を抱えている。「別子ファーム」は、その地域課題をSDGsの考え方で解決させようと3年前に生徒が発案した。活動理念は、「中学生と地域がパートナーシップを結び、地域を元気にする。」となっている。



1 手作りの看板制作

II 主な活動

(1) 地域と協働した野菜づくり

地域の方が持つ野菜づくりの知恵（ノウハウ）を学びながら、生徒はこの土地にあった野菜をつくっている。



2 地域の方に学ぶ様子

(2) 課題解決を目指した話し合い活動

今年度から「別子ファーム」の課題をチームで解決するために3つの部署（「野菜管理部」「地域連携部」「広報・PR部」）を設けて、各生徒の強みや興味関心を生かしながら、対話を重視した活動を展開している。

(3) 野菜販売

昨年度から新居浜市内の観光施設で「別子ファーム」で収穫した野菜を販売している。販売の目的は、「販売を通して、別子山地域とお客様をつなぐこと。」としている。ここでは、生産・流通・小売までのビジネスモデルを学ぶこともできる。



3 観光施設で「野菜販売」

III 成果と課題

(1) 成果

- 地域の方と共に地域課題の解決を目指すことで、持続可能な社会づくりの当事者意識が高まり、社会への見方・考え方が醸成された。
- 自然や人間の営みの原理原則を学びながら、9教科の技能を使うことで、生徒自身が「学ぶこと」の意義を実感できた。

(2) 課題

- 教職員同士や地域との連携をより高め、属人的にならず組織として持続できる仕組みを構築する。

IV 新たな活動の創造「ふるさと別子夏まつり」の復活

「別子ファーム」で地域とのつながりを深めていったことで、今年度、地域の願いであった夏まつりを、生徒が企画・運営して12年ぶりに復活させた。地元の伝統芸能を「別子」で紐づく人たちが一緒に踊れる機会をつくれたことは、地域の大きな喜びや希望となった。



4 夏まつりで伝統芸能を踊る

高齢者が安心して暮らせるまちづくり

— 地域インタビューや福祉体験を通して —

原 好亮（大牟田市立歴木中学校）

I ねらいとESDとの関連

本単元では、地域に住む人へのインタビューや福祉体験活動を通して見つかった課題を分析し、解決するための手立てを議論しながら、高齢者が安心して暮らせるまちづくりに向けた活動の実践へつなげていくことをねらいとしている。

また、本学習で特に働かせさせたいESDの見方・考え方は、「相互性」と「連携性」の2点ある。現在の地域の姿が未来の地域の姿をつくっていくことや、自分や家族、友だちや地域の人々とのつながりの中に生きていること。高齢者や子どもなど、多くの人々が地域や社会に支えられながら生きていることを実感させたい。さらに、単元を通して、「未来像を予測して計画を立てる力、他者と協力する態度、つながり尊重」の3つのESDの資質・能力を育てたいと考えている。

II 校区の特徴について

全校生徒200人弱の本学校は、大牟田市の東部に位置し、東に福岡県と熊本県の県境をつくる三池山、西には大型商業施設は化学工場などがあり、学校周辺には集合住宅や戸建ての住宅が広がっている。市内でも人口が少ない地域にある学校ではないが、本校は小規模校となっており、2年後には隣接する中学との統合が予定されている。その背景には、住民の高齢化がかなり進んでいることが一因としてあげられる。そうした地域に暮らす中学生として、高齢者が暮らしやすいまちづくりを考えることは、誰もが暮らしやすいまちづくりを考えることにもつながるため、本活動は非常に価値のあるものである。

III 単元構成について

はじめに、大牟田市の課題を分析・推測し、人口減少や高齢化世帯の増加などに気づかせる。ここで、今後の活動の見通しをつかむことができるようにする。次に、校区内に住む人に「大牟田市での暮らし」についてインタビューを行い、地域の人々の声を実際に聞きながら、暮らしの中で困っていることを探る活動を設定する。また、高齢者体験や福祉施設との交流を通して、高齢者の生活の実態や困難さを体験して知ることができるようにする。最後に、インタビューや体験活動を通して、安心して暮らせるまちづくりのために、本市が抱えるさまざまな課題に対する改善策を考え、学校外に発信する活動や、生徒会を通じて実際に自分たちで活動し、継続した取組にしていく。

流域から人と水との関わりを考えるESDの実践

— 「1・2年合同奈良めぐり」率川流域コースの実践から —

佐竹 靖・加々見 良（奈良教育大学附属中学校）

I はじめに

(1) 課題意識

今や命を支える水は水道から出てくるものであり、身近な川を流れる水と自分との繋がりを感じる事が難しい。このような状況下では、生徒は自己との関係性を感じられない川の持続可能性や、より良い川との関わり方について主体を持って考えることは難しい。川は生命を育むだけでなく地球の水循環を担っており、気候変動や水害とも関わりが深い。これらの地球的問題を考えると、身近な川との関係性を取り戻し、問い直しておく必要があると考えた。

(2) 実践のねらい

本実践のねらいは、多様な視点から川の役割や人との関わりについて読み解き、持続可能な川のあり方や関わりについて当事者意識を持って考えることを通して、生徒に流域の社会変容にせまる自己変容を促すことにある。

II 実践の概要

(1) 1・2年合同奈良めぐり

「1・2年合同奈良めぐり」は2019年度から実施され、フィールドワークを軸とした地域学習である。教師と生徒実行委員（2年生）が協働してコースづくりを行うことが特色の一つである。本実践は、2022年度実施の全7コースのうち、「率川流域コース」として実施したものである。

(2) 実践の概要

本実践は、奈良市を流れる菩提川（率川）流域を巡り、多様な視点から川の役割や人との関わりについて読み解き、持続可能な川のあり方や関わりについて学ぶ地域学習である。学習過程の概要を右の表に示した。

菩提川（率川）は、源流では春日大社にて神聖な水として扱われ、中流で

は奈良公園の重要な景観を構成し、やがて農業用溜め池を介して市街地の暗渠へと流れる。このような短い流域（約4km）の中で役割が大きく変化する川をたどり、要所で水生生物の観察や、様々な立場で川に関わる人から話を聴き、川に親しみながら川の過去の姿や課題を知る。事後学習では、ロールプレイを行って持続可能な川のあり方や関わりについて当事者意識を持って考えた。

III 結果と考察

実践の結果は、アンケートの記述を中心に分析を行った。詳細は発表に譲るが、生徒の流域に対する価値観の変容が引き起こされ、流域の持つ地域課題について自分事に引き寄せて思考できたことが示唆された。

表. 学習過程の概要

	内容
事前学習	①地域を流れる川（1時間） ②佐保川の水はどこへいく（2時間） ③問いの練り上げとしおり作り（2時間）
当日のフィールドワーク	1・2年合同奈良めぐり
事後学習	①ロールプレイ（2時間） ②フィールドガイド、文集作り、発表動画作り（2時間） ③1・2年合同発表会（2時間）

2022年度 近畿ESDコンソーシアム 奈良教育大学
成果発表会・実践交流会

2022年12月25日発行

近畿ESDコンソーシアム運営委員会 奈良教育大学
〒630-8528 奈良市高畑町